
四丁目解放区

中路太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四丁目解放区

【Nコード】

N6345E

【作者名】

中路太郎

【あらすじ】

敷金礼金家賃なし。必要なのは食費と光熱費と水道料金だけ。四丁目にある解放区と呼ばれるそんな豪邸には、ワケあり住人がたくさんです。どうぞお好きな部屋をお選びください。

二階五号室 金の斧と銀の斧を読んでやる女（前書き）

二階五号室住人紹介

姫百合^{ひめゆり}心花^{みはな}・・・年齢は多分五歳とかそのくらいの女の子。頭が良く空気が読める上に、心優しい癒し系。※心花という名前は、宮座頭数騎さんに許可を頂いて使用しております。

お姉さん・・・本名不明、年齢不明、男性履歴不明の三重不。酒好きで、良く心花に童話などを聞かせてあげているが、心花との関係も不明。

二階五号室 金の斧と銀の斧を読んでやる女

昔々、あるところに、正直で真面目な働き者の木こりが住んでいました。

その日も真面目な木こりは、いつものように森へ行き、木を切っていました。

その時です。

スルッ。

なんという事でしょう、木こりは斧を手から滑らせてしまい、斧はそのまま、ばしゃんと音を立てて、泉の中へと消えていきました。「ああ、何てことだ。大事な斧が泉に落ちてしまった」

泉はとても深く、斧はサッパリ見つかりません。

木こりは悲しくなってきました。

泉のそばで、木こりが泣いていると、ぶくぶく音が聞こえてきて、泉の中からもとても美しい女神様が現れました。

「うひゃあ」

突然現れた女神様に、木こりが驚いていると、女神様はその手に持った輝く金の斧を木こりに見せて、

「貴方が落としたのは、この、金の斧ですか？」

と訊ねました。

正直な木こりは、

「いいえ、それは私の落とした斧ではありません」

と正直に答えました。

そうですか、と言い、女神様は泉の中に姿を消すと、しばらくしてもう一度現れました。

「それでは貴方の落としたのは、この、銀の斧ですか」

今度は眩い銀の斧を木こりに見せて、そう訊ねました。

「いいえ、私の落としたのはその銀の斧ではありません」

今度も木こりは正直に答えました。

女神様はそうですかと言い、また、泉の中に姿を消しました。

その隙を見計らって、木こりは立ち上がりました。

くるりと後ろを向いて、急ぎ足で家へと逃げ帰ります。

「恐ろしい泉だ。もし自分の斧だ何ていったら、なにをされるか分からん」

幸い、木こりは真面目できちんと働いていた為、斧をもう一本買うくらいの蓄えがありました。

あの斧で無ければだめだと言う、こだわりも特にありませんでした。

次の日、町で無事斧を購入した木こりは、今度の事を教訓にして、傍に泉のない森で木を切っては売り、つつましく平和に暮らしました。

しかし、重い斧を三本も持って、誰もいない森に姿を現した女神様こそ、好い面の皮だった事でしよう。

おしまい。

「みはなの知ってるお話と違うよ」

お姉さんの膝の上で、心花は後ろを振り返りました。

見ると、お姉さんは煙草をふかしながら、窓の外の遠くの方を見えています。

「臆病な男ってのはね、こちらから尽くせば尽くすほど、離れていくものなのよ」

一体その目は、どこを見て、何を捉えているのでしょうか。

呟くように語るお姉さんの口調がとても気になりましたが、優しい心花ちゃんはその以上何も聞きませんでしたとさ。

めでたしめでたし。

三階七号室 小心者の内心 コンビニ編（前書き）

三階七号室住人紹介

からすもりぐちゅうこ
烏森口修吾・・・身長百八十六センチの小心者。超高層内弁慶。その胸の内をぶちまけられるのは、同居している敦にだけ。自称エリート銀行員。

なりしたつとむ
鳴下敦・・・売れない漫画家。細かい事にこだわらない性格で性癖も多分そう。修吾と暮らせてる理由はちよつと謎。

三階七号室 小心者の内心 コンビニ編

コンビニの燃えるゴミのゴミ箱には、大別して二つの種類がある。一つは、アホみたいに常に大口を開けているもの。

そして、もう一つが、この、口に内開きの蓋のついたものだ。

こいつが厄介なのは、この蓋を押さなければゴミを捨てられないという事だ。

この何の汁だか分からない汁まみれの蓋をだ。

この蓋と、ゴミ箱の素材は恐らく同じ物。

そして、これを利用する人間は手にごみを持ち、ごみで蓋を押しつつ口をあけるヤツが多いと思う。

だから、この蓋はいつも何の汁だか分からない汁まみれなんだが。ここで一つ疑問が生まれる。

それなら、この蓋のいつも俺たちを見ている方。

こいつは、ゴミ箱の内側、つまり最も汚い部分と同じ状態だってことじゃないのか？

しかも、恐らくそのゴミの最もフレッシュな時に、一番早く接触するのがこの蓋の表部分だろう。

それならいっそ、蓋を外開きにして、其処に取っ手でも付けてくれた方が、よほど衛生的に思える。

内に開く、「押す、入れるタイプ」ではなく。外に開く、「掴む、開ける、入れる、閉じるタイプ」の方が。

確かに行程は二つも増えてしまう。

しかし、これからコンビニに入るにしろ、これからコンビニから帰るにしろ、さあ、いまから新しい商品に触るぞという時に、このゴミ箱を利用し、あまりふさわしくない手の状態になってしまうよりは、百倍もマシだろう。

と、まあここまで語らせてもらったわけだが。

こんな所で大騒ぎするのでは、いかにも素人くさい。

俺の手には、この間このコンビニで買った商品のゴミが、一袋に纏められて握られている。

コンビニのゴミ箱に家庭用のゴミを捨てる事は許されていないが、これはまさしくこのコンビニで生まれたゴミだ。

いわばサケの遡上。

ヤンキーが母校に帰るのと一緒に。

一緒にすると色んな人に怒られそうだが、気にしない。

そして蓋問題。

俺くらいになると、こんな問題は簡単に解決してしまう。

例え、内に開く「押す、入れるタイプ」でもだ。

俺はおもむろにポッケから、ポケットティッシュを取り出す。

そこから、三枚ほどティッシュを抜き出し、ゴミを持ったほうの手の甲、つまり右手の甲にその三枚をあてがった。

プロテクト完了だ。

これで、このティッシュ部分を内蓋に当て、ゴミを投下すると同時に素早く手を引き抜けば、ゴミ箱のベロにも当たらず、ティッシュも自然にゴミ箱の中に入っていくと言う寸法だ。

確かにこの無垢なティッシュ三枚は犠牲になるが、目的のためには手段は選べない。

恐ろしいまでのマキャベリズム。

さあ、実行だ。

ティッシュを手の甲に乗せ、内蓋にあてがう。その隙にゴミを投下し、素早く、手を抜けば。

「完璧……………なっ」

何故、蓋にティッシュが張り付いている！？

何故だ、俺の計画は完璧なはずだ。

何かティッシュが内蓋に張り付くような理由があるはずだが……そうか、分かった。

犯人はこのなんかの汁だ。

蓋についたこの茶色いなにかの（恐らくコーヒー）汁に、べった

りとティッシュがついてしまっている。

誰かがゴミを分別せずに捨てた結果がこれだ。

くっ、触りたくはないが仕方がない。

大部分は直ぐに取れたが、汁の流れに添って、薄っすらとまだティッシュが張り付いている。

しょうがない、使いたくは無かったが、ウェットティッシュを使うしかない。

鞆からウェットティッシュを取り出し、蓋を拭く。

どうせならピカピカにしておいてやろう。

俺は蓋の汚れ部分は勿論、ゴミ箱の純粋な口部分の縁も綺麗にふき取ると、使ったウェットティッシュをゴミ箱の上に待機させ、新しく取り出した一枚で、自分の手を拭く。

この、ゴミになってしまったウェットティッシュはどうするかって？

簡単だ。

今や、生まれたて同然に綺麗になった蓋を素手で押し、ゆっくりと捨ててやれば良い。

これぞ完璧、いや、一石二鳥というヤツだ。

俺はポケットティッシュを鞆に入れながら、優雅にコンビニの扉をくぐった。

三階七号室 小心者の内心 コンビニ編（後書き）

別の連載の事で悪いんですが、「ヒーローの条件」多分来週までには書き終わります。

待ってくださった方々本当にすみませんでした。

一階二号室 雨は何故痛くないのか？（前書き）

一階二号室住人紹介

天城信行・・・三十七歳。既婚者ながら奥さんとは別居中。信行は奥さんの事を華さんと呼んでいるが、奥さんの本名は不明。結構良い所に勤めているはずなのに、何故か貧乏。

天城優美・・・七歳の女の子。信行の実の娘で、とても気が強く性格の激しい所はお母さん譲り。実は結構な甘えっ子。※天城優美という名前は、小説家になろう秘密基地にて、美姫さんにつけていただきました。本当にありがとうございます。

一階二号室 雨は何故痛くないのか？

きっと大丈夫、なんて、最初に言い出した人は誰なんだろう。

家の外で降り頻る雨の音を聞きながら、天城信行てんじょうぶゆきはそんな風に思った。

「ねえ、優美ゆうみ。そろそろ機嫌を直してくれないかな」

信行は正座の姿勢のまま、ベッドの上の小さな膨らみに情けない声をかけた。

膨らみからの返事はない。

たった一枚きりの薄い夏蒲団を頼りに、籠城を決め込んでいるのは彼の娘の天城優美だ。

御年七歳でありながら、自分の持っている武器の使い方をきちんと心得ている立派なレディである。

対して、今年三十八歳を向える信行は、こんな時でもイマイチどうしたら良いかがわからない。

そんなことはしたくても出来ないが、もし仮に無理矢理にでも布団を引っぺがそうものなら、その小さな口からとても七年で集めたとは思えない罵声の数々と、スナップの利いた平手打ちが飛んでくるだろう。

約束を破った事で既に頼ったに小さなもみじを咲かせている信行は、この厚い城壁を破るべく、何か突破口はないものかと必死で部屋中に視線をやる。

結果は、なーんにもありやなかった。

あるのは、いかにもこのお屋敷の物らしい高そうな調度品と、それに比べると慎まし過ぎる親子の私物だけだ。

(―――あ)

その中から、壁に掛けられた優美のワンピースを見つけて、信行は思わず声を上げそうになった。

彼は正座の姿勢のまま、しゅんと肩を落とす。

遊園地に行く約束をしていた。

本当は先週行く予定だったのが、信行に急な仕事が入ってしまい、その日は中止になった。

「パパの嘘つき！ ホッキガイ！」

「ホ、ホッキガイ？ いや、ごめんね。取引先の人が、どうしてもお父さんじゃなきゃダメだって言ってるんだって」

お出かけ用の一張羅からスーツに着替え直しながら信行は謝る。

「そんなの私には関係ないじゃない！ この、タスマニアデビル！」
「タ、タスマニア何？」

針のように鋭い正論だった。

おめかしした格好には相応しくなく、目に涙をためながら優美は怒っている。

「えっと、うん、そうだね」

ネクタイをしめる手を止め、信行は屈んで優美に視線を合わせた。

「ごめん。来週はきっと大丈夫だから、遊園地には来週行こう」

優美は窺うような視線でこちらを見ていた。

信行の目に嘘がないのを見て取ったのか、多少不満そうにしながらでも、本当？ と聞いて来た。

「約束。それに代わりって言ったらなんだけど、今日の夕飯は外で食べよう。ね」

「……うん」

そうして、ようやく許してもらった。

それなのに。

（こんなんだから、華さんにも愛想を尽かされちゃったんだろうな、俺）

細君だった人を思い、信行は溜息をついた。

（けど、優美にまでそんな思いさせちゃダメだ）

きちんとフックに掛けられたワンピースに頷くと、声の調子を改める。

「優美、遊園地には来週行こう……って言っても信じてもらえない

かもしれないけど、お父さんに、もう一度だけチャンスをくれないかな？」

もぞり、と小山が動いた。

ちゃんと聞いていてくれているらしい。

「今度はきつと、あ、いや、今度は絶対。もし雨が降ったら室内で遊べる所に行けばいいし」

小山は沈黙していた。

ダメか、と肩を落としかけた時、布団の端から優美が顔だけ覗かせた。

頭巾のように布団で頭を包くもませて、雨の日には毛先がくるくるになっってしまう癖っ毛を隠している。

眉をつり上がらせた険しい表情を見ると、まだまだ許してくれたわけでは無さそうだ。

「ねえパパ。雨ってどうして痛くないの？」

「えっと…？」

脈略もなく突然そんな事を聞かれて、信行は混乱する。

「昨日テレビで一緒に見てたでしょ。芸人の人が、高い所からプールに飛び降りるヤツ」

「ああ、うん」

八時ごろにあった番組で、度胸試しのような企画だったように覚えてる。

何組ものタレントが出ていて、誰が一番早く飛び込めるか競うものだ。

ナレーション

「声の人が、こんな高い所から落ちたらプールもコンクリートと変わらないって言ったのに、どうして雨は痛くないの？」

「ああ、えーっと」

「だっておかしいじゃない。雨なんてもっと高い、雲から降ってるのよ。私の考えが間違ってるなら、雨は石のように硬いはずなの」番組で何人か腹を赤くして痛がっていたのを思い出した。

「だから、パパは今から傘も持たず外に出て、雨が石のように固い

かどうか確かめてきて」

「あ、あの、その理屈が正しかったらお父さん死んじゃうんですけど…」

「だったらどうして痛くないの？」

そう言われても、信行にも正しい事はわからなかった。

なんとなしに思い浮かぶのは、大きさだったりとか、重さだったりとか、あとは液体か固体かとも関係しているかもしれない、というくらいの物である。

常識にそった手ごたえのない理由はいくつか思い浮かんでも、これだ、と思えるものはなかった。

「えーと、あ！ うんとねうんとね、それはきつと、雨さんが自分も痛くないようにって、途中でパラシュートを開いちゃうからだよ」突然思いついたそれは、会心の答えのように思われた。

優美がじつと信行を見る。

「パパ？」

「うん」

「そういうのはいいの」

そういうのはいいらなかった。

ごめんなさい、と謝ると、信行は肩を落とした。

良い答えだと思ったのに…。

優美は上体を起こし、てるてる坊主のような格好のまま、呆れたような目で信行を見ていた。

（華さんとおんなじ目をしてる）

そんな感想を抱いた信行だったが、こうして縮こまっけていてもしようがない。

よし、と膝をたたいて立ち上がる。

「どうしたの？」

「ちよっと、良助君にパソコンを使わせてもらってくるよ。雨がどうして痛くないのか、ネットで調べてみる」

管理人室においてあるパソコンの事を言った。

信行もノートタイプを持っていたが、今日は仕事のことは考えないと決めていたので、わざわざ会社に置いて来てしまっている。

そういう訳で、部屋を出ようと振り返ろうとしたとき、ついつとズボンを引かれた。

不思議に思い視線を下げると、優美がベッドから体を乗り出し、ちっちゃなもみじ製造機で信行のズボンの端を握っていた。

「なに？　どした？」

信行がそう訊ねると、優美は何故か顔を真っ赤にし、悔しそうな困ったような顔になった。

しばらく嫌そうな躊躇いを見せた後、嘘みたいに小さい声で一言呟く。

「……いっちゃやだ」

こんな時でも彼女は視線を逸らしたりしない。

相当恥ずかしいらしく、心配なくらい顔を赤くしているが、泣き腫らした目ははずれない。

おかげで、信行は表情が緩みそうになるのを、頬を掻いて誤魔化さなければならなかった。

「あ、うん」

もみじをなぞりながら、ぎこちなく頷く。

それから、そっと両手を伸ばし、てるてる坊主のままの優美を抱えあげる。

「じゃあ、今日はこうして二人で雨が痛くない理由でも考えてようか」

胸の辺りで小さく頷く感触。

苦笑しつつ、信行はベッドに腰掛けた。

優美の頭に掛かった布団をはずし、跳ねてしまっている毛先を指でつつく。

怒られるかとも思ったが、特に殴られたりはしなかった。

「来週は絶対行こうね」

また、胸に押し付けるようにしていた顔が縦に動いた。

それと同時に、その辺りで暖かい湿り気を感じる。

（そんなに行きたかったのか）

この際、仕事は理由にならないだろう。

改めて反省しながら、優美の頭を撫でる。

「うーん、けど、お父さんはこっちの雨のほうが痛いなあ」

「ぐす……そういうのもいい」

そういうのもいいしかった。

鼻をすするくぐもった声が消えて、あとは雨音ばかりが室内にこだましていた。

一階二号室 雨は何故痛くないのか？（後書き）

解放区

1 中国革命の過程において中国共産党の支配した地区の称。ソビエト区とも。

2 一般に、革命勢力の支配が確立した区域。

（広辞苑調べ）

自分の言葉の知らなさに、寒気すら覚える今日この頃です。

二階五号室 桃太郎を読んでやる女（前書き）

二階五号室住人紹介

姫百合^{ひめゆり}心花^{みはな}・・・年齢は多分五歳とかそのくらいの子。頭が良く空気が読める上に、心優しい癒し系。※心花という名前は、宮座頭数騎さんに許可を頂いて使用しております。

お姉さん・・・本名不明、年齢不明、男性履歴不明の三重不。酒好きで、良く心花に童話などを聞かせてあげているが、心花との関係も不明。

二階五号室 桃太郎を読んでやる女

昔々あるところに桃太郎という桃から生まれた青年がおりました。桃太郎は、ある日言いました。

「おじいさん。おばあさん。僕は鬼ヶ島へ行つて鬼共を退治してきたいと思います」

おじいさんとおばあさんはとても心配しましたが、桃太郎の決心は固く、結局鬼ヶ島に行く事になりました。

「これは、ワシが昔使っていた刀だ。これを持って行きなさい」

「ありがとうございます」

おじいさんはその刀のほかに、立派な服もくれました。

「桃太郎キビ団子をこさえたよ。お腹が減ったらこれをお食べ」

「ありがとうございます」

おばあさんはたくさんさんのキビ団子のほかに、立派な旗をこさえてくれていました。

そこには日本一と書かれています。

「それ、日本一の桃太郎。やれ、日本一の桃太郎」

「それでは、行ってまいります」

おじいさんとおばあさんの頑張れの声を背中に受けて、桃太郎は鬼退治へと出掛けました。

その道の途中。

「桃太郎さん桃太郎さん。お腰につけたキビ団子、一つ私にくださいな」

茂みの中から、犬が現れて桃太郎に言いました。

「あげましょうあげましょう。これから鬼を成敗に、ついてくるならあげましょう」

桃太郎はキビ団子をあげると、犬を家来にして、また歩き出しました。

その途中で、今度は猿と雉を同じように家来にして、桃太郎は鬼

ヶ島へと急ぎます。

そしてついに鬼ヶ島へと到着しました。

船で海を渡り、大きな門の前に着いたとき、桃太郎は大きな声で言いました。

「やい、鬼ども。桃太郎が退治に参ったぞ。ここを開けろ」

すると、ゆっくりと門が開き、中からたくさんのおおきな鬼たちが出てきました。

「野郎共、桃太郎をやっつけてしまえ」

さあ、決闘の始まりです。

「わんわん」

犬は鬼の足に噛み付きました。

「うひゃあ、痛い痛い」

「ききー」

猿は鬼の顔を引っかきました。

「こりゃかなわん、勘弁してくれえ」

「けーん」

雉は鬼の目を嘴でつつきました。

「ぎゃああああ」

その頃、桃太郎はというと。

鬼の大將と、一騎打ちの真っ最中です。

かきーんかきーん。

刀を打ち合う音が聞こえてきます。

「やあ、とう」

「む、むむむ」

かきーんかきーん。かきーん。

「ま、まいったあ」

遂に桃太郎は鬼の大將の刀を弾き飛ばしました。

「見たか。この桃太郎こそ日本一」

そうして桃太郎は高々と刀を持ち上げます。

「ははー」

その姿を見て他の鬼達も、皆ひれ伏しました。

「それ、日本一の桃太郎。やれ、日本一の桃太郎」
家来たちも大喜びです。

桃太郎は鬼たちが村人たちから奪っていった金銀財宝を取り返すと、

「もう悪さをするんじゃないぞ」

そう言って家へと帰っていきました。

それにしても、問題はこれのお腰につけたキビ団子です。

「これを全部食べて帰らなければ、おばあさんが悲しんでしまう」
そう言って、たくさんのキビ団子を家来たちに分けました。

中でも特に鼻の利く犬が、

「桃太郎さん桃太郎さんこのキビ団子はもしかしたら腐っているかもしれないせん」

そう言って殆ど確信を持って鼻を押えました。

猿も雉も、自分の中にある野生がそう告げていました。

「それでも全部食べなければ帰れない」

そう言われても、ここが養子のつらい所です。

養父母に出されたものを、残すなんて事は考えられません。

仕方なく一人と三匹は、酸っぱいキビ団子を頑張って平らげたそうな。

おしまい。

「みはな、わんちゃんが好き」

お姉さんの膝の上で、心花みはなは後ろを振り返りました。

「メだ……マザコンはダメだ……マザコンはダメだ……マザコンはダメだ……マザコンはダメだ……マザコ」

見ると、お姉さんは焦点の定まらない眼差しで、うわ言の様にそう繰り返していました。

心花はお姉さんの膝の上からそっと降りると、大切なものの箱の中

から塗り絵とクレヨンを取り出して、離れた所で腹ばいになってそれを開きました。

今はそっとしておこう。

そんな思いと共に、今日は好きなだけお酒を飲ませてあげようと心に決める、ちよっと甘い心花ちゃんなのでした。

二階五号室 桃太郎を読んでやる女（後書き）

キジはとても恐いヤツです。

第0話 四丁目解放区

何本かの電車を乗り継いで、蛙鳥駅あとりという小さな駅についたのは、十三時を少し過ぎた頃だった。

駅から出て首を廻らせると、車が既に待っていた。

ロータリー内のバス停に沿うようにして、黒いRAV4が停まっている。

稲森良助いなもり りょうすけは、顔を輝かせてそちらへと走りよって行った。

「リョウ！」

ウィンドーがゆっくりと下がって出てきた顔に、良助は微笑みかける。

「悠にい」

顔を寄せると、太い腕が伸びてきてがっちりと首を決められた。

「この、でっかくなりやがって」

「わ、嘘だよ、一年しかたってないのに」

わしゃわしゃと頭を撫でられてから、助手席をしめされる。

「男子三日会わざれば、だ、一年ありや十分だろ。ほら、とっとと乗れよ」

「うん」

ボサボサになった髪のまま、良助は助手席へと回って、車に乗り込んだ。

「飯は？」

「電車の中で食べた。お弁当美味しかったよ」

「そりゃ良かった」

「この車どうしたの？」

「仕事で必要だから買ったんだよ。親父に借金して。月二万ずつの返済」

運転席の川島悠翔かわしま ゆうとは、わざとらしく顔を顰めて見せると、小さくクラクションを叩いた。

プツというラッパの音が、主人の内心を現すように不満げな音で鳴った。

ロータリーを出て、国道を走り始めてから十分、車内の時間は世間話に費やされていた。

「皆は元気か？」

「元気だよ。あ、でもタカトが来月園を出るから、アキとかミミが寂しがってるけど」

「あいつらタカトに懐いてたからな……で、先生たちは？」

良助はにんまり笑って、悠翔の顔を窺う。

「花先生なら元気だよ」

「な、俺^{おりや}あ別に……」

あからさまに動揺してみせる悠翔に、予想通りの手応えを感じて良助は嬉しくなる。

「悠にいいよろしくってさ」

「マジでかつ！」

「ちょっと前！」

「うわっと」

悠翔がハンドルを切って、目の前に迫った車の尻を慌ててかわす。良助がこちらを振り向いた悠翔の顔を両手で挟んで、目線が無理矢理前に戻したおかげで、事なきを得た。

その惰性のまま右車線に車体が移動して行って、いったん停止する。

「ふいゝ間一髪」

「こんなタイミングで死んじゃうなんてごめんだよ」
信号は赤くなっていた。

「悪い悪い。てかお前がそんな事言うからだなあ……」

「だって頼まれたんだもん」

しれっと答えた良助の頭を小突いて、悠翔はステアリングに顎を

乗せた。

懐を探って、煙草と一緒に一枚の小さなメモ用紙を取り出した。
「それにしても、良く先生たちが許したな。お前の事引き取りたいって人居たんだろ？」

悠翔が、啞えたその一本に火を寄せて、美味しそうに煙を吸い込む。

「うん。でも、長門さんたちはいい人たちだったけど、今更親だなんて思えないよ」

良助はポケットから一枚の写真を取り出した。

動物園の虎の檻の前で、今より小さな良助と一緒に、一組の中年の男女が微笑んでいる。

今回の良助の決断を、最後まで惜しんでくれた人たちだ。

「にしたって、唯一の父親の手がかりが、よりによってここかよ」

「悠に知ってるの？」

信号が青になって車が発進した。

車の流れが多く、道路の途中で車が止まったところで、メモが渡される。

そこには住所が書かれていた。

Y県 S市 蛙鳥町^{あとり} 四丁目。

名義は堂島宅となっていた。

「そこな、ここらじゃ結構有名な所なんだよ。なんか昔の下宿屋みたいなところで、親父が言うには、光熱費と食費以外、家賃すら取らねえんだとさ」

右折信号が点って、再び車が動き出す。

体に横向きにGがかかり、直ぐにウインカーの音が消えた。

「え、でも、そんなトコだったら、たくさん人が集まるんじゃないの？」

「それが、不思議とそうはならないらしい。一人入っちゃ一人出て、一人出ちゃどっかからまた一人やってくるって具合だ。ま、よっぽど事情がない限りそんなトコ敬遠したくなるってのもあるだろうな。」

とにかく得体が知れないんだ」

子供に怪談を語って聞かせるような声で言われて、良助は少し不安になった。

この決断は間違っていたのだろうか。

もう一度ポケットから写真を取り出そうとして、何とか思いとどまる。

「そういう所も含めてな……」

気づけば、車窓にはどこまでも続いていそうな塀が映っていた。

ここまで、駅からの道順は良助の頭には残っていない。

時間はおよそ三十分くらいが経っているだろうか。

塀に平行して車が停まる。

シートベルトをはずして、悠翔が車外へと降りた。

慌てて、良助も扉を開ける。

降り立った地面で見た光景にあんぐりと口が開いた。

「このでっけえお屋敷の事を、ここいらのヤツは……」

高く長い塀の隙間。

鉄扉の開かれた大口に寄りかかるようにしながら、悠翔はペツと煙草を吐き捨てた。

「四丁目の解放区って呼んでんだよ」

煙草を踏みにじった悠翔の向こう側に、思わず東京ドームを引き合いに出したくなるような広大な敷地が広がっている。

「四丁目……解放区」

遠くに巨大な建物の姿を捉えながら、良助は口の中でそう呟いていた。

第0話 四丁目解放区（後書き）

一応本編です。

今回の登場人物たちの内何人か、宮座頭数騎さんに頂いた名前を使わせていただいております。

宮座頭さん本当にありがとうございます。

これからもう少しちゃんとします。

二階二号室 過去↓↓現在（前書き）

二階二号室住人紹介

鳴下千尋・・女の子が好きな二十四歳。好きな女の子のタイプは小動物系。好きな女には、冬籠りのために、どんぐりとか集めてて欲しいと思ってる、ワリとダメな人。

矢千坂弥栄子・・恋愛に対する理想があまりない十九歳。とりあえず付き合ってみてから色々考えるタイプ。ただ女に対する趣味ははっきりしていて、パック牛乳を直飲みする女とかが好き。

二階二号室 過去↓ ↓ 現在

「ちんちんって、何のためについてると思う？」

バイト先の先輩と初めて飲みに行った日。

その時選んだ居酒屋は十一時には店を閉めて、二軒目、彼女の自宅に誘われたときにも、特に何も考えずに頷いていた。

舞い上がっていたのかもしれない。

なりした ちひろ

鳴下千尋は、文句なしの美人だった。ちんちくりんの私とは違って、背が高く、あまり笑わない目の鋭い人だ。長い髪を投げやりな金色に染め、いつも美味しくなさそうにショートホープを吸っている。このショッポ私にとってかなり高ポイント。

すらりとしたモデル体型のワリに、ヤンキー雑誌に載ってそうな雰囲気を纏わせ、そのくせ面倒見が良かったりするもんだから、バイト先の男の子は勿論、女の子たちにもかなり人気があった。

そのミーハーの中に私もいたわけで。

「今日一緒飲み行こうか？」

バイト終わりに、そう誘われたときにも、一も二も無く承諾していた。

「聞ってる？ ヤヤコ」

彼女は私のことをヤヤコと呼んだ。

やちんか ややく
矢千坂弥栄子。縮めてヤヤコ。

ラベルがスペイン語の、細長い瓶のお酒が乗ったテーブルの向こう側。真顔で尋ねてくる千尋さんに、私の言葉は濁った。

「や、どうでしょう」

目を伏せると、くぐもった声になる。

「……」

千尋さんは無言。

いや、だってちんちんだよ。ランランとかカンカンとはワケが違うんだよ。続としたらオブ・ジョイトイだよ。……それにしても

ジョイトイって何？

「こういう質問には即答してくれないと」

そんな事できる人イヤです。

不満そうに千尋さんは言うし、今更少女ぶる気も毛頭ないが、ちんちんに対して即答できるほど明確な考えのある女の子は、流石にどうかと思う。

まごついている私に、千尋さんが簡潔に発表してくれる。

「正解はセックスのためです」

「いや、流石にそのためだけに付いてるってコトは…」

淡泊なワリに断言的な正解発表に思わずそう答えたものの、よく考えれば、体の部分でマルチな活動をしているのは、口と手くらしいか浮かんでこない。

……とは言うモノの。

「じゃあ、他にどんな事に使ってる？」

と、聞かれれば、何か別の答えを探してしまうのが人情つてもので。

「……排泄行為」

「無くてもできる」

「えと、じゃあ、武器になる」

「歴史上どこにもいないから、そんな武将」

「持つてるとなんか落ち着く」

「そうそうJK必須のアイテムだよね……聞いたことねーよ」

この間、全て真顔で返され、私も口を閉じる。

千尋さんの据わった目はお酒で血走っていて、無表情でも十分恐ろしい。

「…セックスのために付いてるのかも」

無言の圧力に屈した私は、静かに頷いた。よくよく考えてみれば、あんなモノにそこまでして庇い立てする義理もないし。

これまでのいろいろがよぎって、何となく納得しかけてもいた私は、顔を上げて千尋さんの方を見た。

「それは、いわゆる教訓とかそういうったもんですか？」

私の言葉に千尋さんは首を振る。

「ううん、言い訳」

言い訳？

千尋さんは膝歩きでテーブルを回ってこちらへとやってくる。

おお、顔ちっせ。じゃなくて。

「ち、近くないですか？」

私の問いかけは無視され、キュツと両の手を握られる。

「男女の恋愛には、生き物としてどうしようもない下心があると思うんだ」

生真面目な口調で、そんな事を言ってくる。……えと、目がマジ過ぎるんですけど。

「は、はあ」

「自分の遺伝子を保存するためだけに男と女は恋をする、とまでは言わないけど、男女の恋愛は心と体でするモノだと思う。その点……」
ゆっくりと顎から頬を撫でられる。愛おしそうに私の髪を梳きながら、体温が過ぎていった。

「女同士なら心だけで恋愛が出来る」

「は、はい？」

「少なくとも、その確証がある」

「え、えと、女同士じゃ子供が出来ないことがですか？」

千尋さんはコクリと子供みたいに頷いたあと、私の正面にきちんと正座した。つられて、私も正座。

ダルビッシュの球がぶつかるとみみたいなもの凄い力で、両肩をつかまれる。

「ぶっちゃけ、私、ヤヤコが好きなの」

私の目を見ながら、千尋さんがぶっちゃけた。

酔いは完全に醒めているのに、目の前がグルグルしだした。歪む視界の中、冗談の入り込む余地のない真剣な眼差しが私を射抜いている。

「そ、それは、それじゃあ、千尋さんはいわゆる干しぶど…」

「それレーズン」

何とか入り込んだ。

「あー、今年もスキーの季節が…」

「シーズン」

「八景島…」

「シーパラダイス…：シーの方が残っちゃってるし」

すっとぼけを一々拾われて、逃げ道が無くなる。

いや、逃げ道がないって。じゃあ、ほんとに、千尋さんは…レ…。
そこまで思ったとき、千尋さんの手に力がこもり、私は腰を支点に上体を九十度後ろに移動。ぼすんと背中にベッドの感触を感じた時には、千尋さんの顔がますます近くなっていた。

「…嫌だったら、拒んで」

声には抑揚が無く、ただ零れる吐息は少し乱れていて。投げ出された私の手の中に滑り込んできた彼女の掌は、信じられないくらいに熱い。

「え、の、イヤ、あの、んむ？ むー?!」

靄のかかった正体のわからない言葉は、空気に触れることなく、彼女の唇に吸い込まれていった。

「…：ん…：ふ…：…」

触れている部分から、スーと千尋さんの熱の引いていくのがわかる。

ああ、なんだ、私の体温が上がってるんだ、と、現実におっつかない頭でぼんやりと考えた。

千尋さんの唇は、柔らかくて、少しかさかさしていて、私にも負けないくらいに熱かった。

時間の感覚が無くなって、チラチラ見える天井はダリの作品みたいにどろどろで。唇がくっついたり離れたたり、舌が入ってきたりれ

ろれろされたり。

お互いの意識が曖昧に混じりあい始めたとき、ぴちゅつと名残惜しそうな音を立てて、唇が離れていった。

「…はあ……」

熱っぽい目で私を見てくる千尋さん。長かったキスに呼吸は荒い。

私は、自分の様子を気にする余裕も無く、

「……さ、さんぐらふ…めーか………」

「……それ、レイバン」

くだらねー冗談を言うのが精一杯だった。

四階、屋根裏と呼ばれる空間 四丁目ストリームチャンネル（前書き）

四階住人紹介

DJアフロ・・・テンション、血糖値共に高いデブアフロ。昔好きだった子に、「良く見ると前方後円墳に似てるね」と言われた事がある。

ネクラちゃん・・・口数が少なく、基本人間が嫌いな百パー闇系。学校で苛めにあっているが、結構やり返したりもしてるし、言ってる事はこっちのがきつかったりする。

四階、屋根裏と呼ばれる空間 四丁目ストリームチャンネル

「どうもー。個性が強過ぎる髪型の所為で、クラスから浮いてるアフロでーす」

「豚死ね！ 家畜クセエ！ 等、机がよく誰か宛の掲示板に利用されるネクラです」

「わお！ ネクラちゃん変にポジ！ という訳で今夜も始まりまして四丁目ストリームチャンネル！ 改めましてDJアフロでーす！」

「アシスタントのネクラです」

「このラジオは四丁目と言う限られた空間だけにお送りする、ミツナイワンミニッツショー！ 今夜も熱いメッセーじ電波に乗っけてお送りするぜい！」

「H高のS木とK戸マジで死んでくれ」

「うん…よし！ さ、ネクラちゃんのホットな放送禁止用語ビードが飛び出したところで、早速最初のおはがきから行こうかー。さあこちら、ラジオネーム童話お姉さんから。『どうやったら私は幸せになれるんでしょうか？』。さあ、ネクラちゃん今夜もホットでクールな答えをよろしくどうぞ！」

「知るか」

「フォッホーウ！ 幸せなんて人それぞれ！ 私は貴方が幸せになる方法は知らないけど、いつか貴方にしか手に入れないピツタ

りの幸せが見つかるはずよ！ 今日も素敵に熱いアンサーをサンキ
ュー！ ホント！ そういう事、DA☆YO☆NE！ ネクラちゃ
ん！」

「……………マジうぜえ」

「おっとうとう、それじゃあ今夜最後の一曲になっちまった、聞いて
くれえい！ DJアフロで『あるはずの五千円がない』ヒーヤウ
イーゴー！！」

二階五号室 一休さんを読んでやる女（前書き）

二階五号室住人紹介

姫百合心花^{ひめゆり みはな}・・・年齢は多分五歳とかそのくらいの女の子。頭が良く空気が読める上に、心優しい癒し系。

お姉さん・・・本名不明、年齢不詳、男性履歴不遇の三重不。酒好きで、良く心花に童話などを聞かせてあげているが、心花との関係も不明。

二階五号室 一休さんを読んでやる女

この日一休さんは將軍様に呼ばれて、將軍様のお城に登っていました。

將軍様は一休さんにいつもいつもトンチ勝負を挑んでくる少し困った人です。

一休さんが頭を下げていると、隣にある屏風を扇で指しながら將軍様は言いました。

「実はな、夜な夜なこの屏風の虎が出てきては悪さをして困っている。何とかしてくれ一休」

屏風には、なんとも立派な虎が描かれていました。

確かにその迫力たるや、今にも飛び出してきそうな勢いです。

「分かりました。しばしお待ちを」

そう言って一休さんは座禪を組みました。

周りにいる將軍様やお侍さんたちもなれたもので、一休さんが座禪を組んだ途端、邪魔しないように皆一様に口を閉ざします。

「……………分かりました」

一休さんはそう言うと、ぺろりと唇を舐め、不敵に笑いました。手早く鉢巻をして、たすきがけをすると、縄を持ってきてもらって、屏風の前で構えました。

「それでは將軍様。まずは、この虎を屏風から出してみてください」

「何を言っとるんじや一休、虎が出てくるのは夜だと言うとるじやろう、とりあえず寢床を用意させよう」

「……………へ？」

啞然とする一休さんを置いて、將軍様は部下にテキパキと寢所の準備をさせました。

瞬く間に寢仕度を整えられて、一休さんは日も高いうちから、布団に押し込められました。

—————その夜。

「がるるるるるるるるるるるるるるるる……」

青白い火の玉を従えながら唸っている虎の前に、一休さんは立ちすくんでいました。

鉢巻がずれ、たすきは緩み、手に持ったダラリとたれている縄は、得物として滑稽ですらあります。

「ほれ一休何をやっとする。なんとかせんか」

部屋の外から、数人で襖に隠れるようにして見ていた將軍様が何か言っていました。

茫然自失としている一休さんにはなんのこっちゃ分かりません。

（坊主が求められてるとはな……）

牙を剥く虎の前で、一休さんはしばらく突っ立っていましたが、意を決したように鉢巻を巻きなおしました。

たすきを素早くかけなおすと、手に持った縄をひゅんひゅんと回し始めます。

「……まあ、ただではやらせんさ……」

唇を舐めると一休さんは不敵に笑いながら、足を一步踏み出しました。

——これが世に言われる、一休の虎退治、でございます。

「てつきり尻フェチだと思ってたのに、鎖骨マニアとはね。……人は見かけによらないわ」

窓辺で月を眺めながら、お姉さんは言いました。

どこか嬉しそうな彼女に、どうしてか心花まで嬉しくなっています。

「なにかいいことあったの？」

大きな一升瓶を抱えてお酌をしながらたずねると、お姉さんは盃を傾けながら頷きました。

「人間、何を求められるか分からないわよね……」

その言葉に頷けるほど、心花ちゃんは大人ではありませんでしたが、盃が空になったのを見てお酒を注ぐと、お姉さんは嬉しそうな顔になりました。

良く分からないけど、嬉しそうだからそれで良いや。
そう思いつつ、一緒に月を眺める心花ちゃんでした。

二階五号室 一休さんを読んでやる女（後書き）

それでは良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6345e/>

四丁目解放区

2010年10月20日19時54分発行